

# 総括研究報告

---

# 1 HIV 陽性者に対する精神・心理的支援方策および連携体制構築に資する研究

課題管理番号：H30-エイズ一般-30150701

## 研究代表者

山田 富秋（松山大学人文学部 教授）

## 研究分担者

大山 泰宏（放送大学 教授）

安尾 利彦（独立行政法人国立病院機構大阪医療センター 主任心理療法士）

村井 俊哉（京都大学大学院医学研究科 教授）

池田 学（大阪大学大学院医学系研究科 教授）

## 1. 研究目的

予後が改善し慢性疾患と位置づけられるまでになった HIV 感染症であるが、HIV 陽性者は慢性的な生きづらさや心理的困難を抱えていることが少なくない。今年度で完成年度を迎える本研究は、薬害被害者を含めた HIV 陽性者に特有の心理的困難を多角的に明らかにし、そこから得られた知見に基づいて、効果的な精神・心理的支援方策の開発と提言を行う。本研究開発課題を構成する研究 1 から研究 5 までの研究目的について以下に説明する。

### 研究 1(大山) 「HIV 陽性者へのカウンセリング効果の検証」

HIV 陽性者に対する心理カウンセリングに対する効果的な心理支援やカウンセリングの方法について検証する。

### 研究 2(安尾) 「HIV 陽性者の心理的問題点と対策の検討」

HIV 陽性者の行動面の障害を伴う心理学的問題、特に受診中断に関して、その発生状況、受診中断と関連する要因、受診中断に至る心理動機を明らかにし、それに基づいて受診中断予防、受診再開、受診継続のための適切な心理学的介入方法を明らかにする。

### 研究 3(村井) 「MRI 画像による HIV 神経認知障害の神経基盤の解明」

HIV 関連神経認知障害 (HAND) 診断基準領域に加え、表情認知、意思決定等の障害が報告されているが、その神経基盤の知見は乏しい。今年度は MRI 画像と最新の画像解析技術で、これらの障害の実態を明らかにし、陽性者の心理的支援の基礎情報を提示する。

### 研究 4(池田) 「HIV 陽性者の精神疾患医療体制と連携体制の構築」

本研究の目的は、大阪府内の HIV 陽性者の精神疾患合併症の実態および診療の課題を明らかにし、HIV 陽性者に対する精神科医療機関の連携体制を構築するため

の基礎資料とすることである。

### 研究 5 (山田) 「薬害被害者の心理的支援方法の検討」

薬害被害者の抱える HIV 感染というスティグマがどのような「生きづらさ」生み出しているのか、インタビューから得られたライフストーリーを歴史的文脈に位置づけることによって質的に読み解き、そこから被害者にとって効果的な心理的支援方法を考察する。今年度は薬害被害者の「生きづらさ」を構成する HIV 感染に由来するスティグマの心理社会的意味を明らかにすることによって、効果的な心理的支援方法を考察する。

## 2. 研究方法

### 研究 1(大山)

エイズ治療拠点病院である京都市立病院と連携し、HIV 陽性者に合計で 25 回のカウンセリングをおこない、事前・事後、および中間において、心理学的アセスメントをおこなう。

### 研究 2(安尾)

大阪医療センターの HIV 陽性者から受診中断群と受診継続群を抽出し、欲求不満状況への反応を査定する P-F スタディを実施し、その結果を標準スコアと比較した。

### 研究 3(村井)

大阪医療センターで取得済みの患者群・対照群各 40 名、合計約 80 名のデータを用い、神経認知課題の患者群と対照群の比較、患者群の課題成績と脳灰白質体積の相関等についての画像統計解析を行う。初年度の灰白質、昨年度の白質の所見との統合的解釈を行う。

### 研究 4(池田)

大阪府の HIV 陽性者に Web アンケート調査を実施し、精神科の受診のしづらさや、メンタルヘルスの問題での受診希望についての実態を明らかにする。

### 研究 5 (山田)

2013年6月～2016年11月間に蓄積した薬害被害者のインタビュー逐語録を歴史的文脈に位置づけ、ライフストーリー研究法を通して分析する。

(倫理面への配慮)

研究開発代表者は松山大学における人を対象とする研究の倫理審査に関する委員会の審査を受け、研究遂行の認可を受けた。各研究分担者は所属先及び研究対象の機関において倫理審査を受け承認済みである。

### 3. 研究結果

#### 研究1(大山)

今年度に終了した事2例については、現在、多層的なデータを解析中である。昨年度の終了・中断事例2事例に関しては、質的・量的に分析をおこなった。

#### 研究2(安尾)

標準スコアと比べ、中断群は自罰的な反応が多く、継続群は攻撃に関連する反応が少なく、問題解決のための努力に関する反応が多かった。

#### 研究3(村井)

報酬を伴う意思決定課題 (Cambridge gambling task [CGT])、意思決定に先立つ情報収集課題 (Information sampling task [IST]) で患者群に障害がみられた。課題と灰白質体積との相関領域について、IST で患者群の前帯状皮質に有意な相関がみられた。

#### 研究4(池田)

2021年1月8日から1月31日までの期間でWeb調査を実施した。結果は分担研究報告を参照のこと。

#### 研究5(山田)

薬害被害者はHIV感染した自分をネガティブなものとして捉え、孤立化する傾向があった。しかし、同じ感染者(ピア)との接触をきっかけに好転した例も見出された。

### 4. 考察

#### 研究1(大山)

2事例の中断事例の分析からは、カウンセリングにおいて関係性が変化していくときに、通常の事例以上に不安が大きく、これが治療抵抗に結びつきやすいことが示唆された。

#### 研究2(安尾)

受診中断者は自分に攻撃を向けやすい傾向があり、継続受診には自罰傾向の緩和および問題解決に向けた方法の提示などの援助が重要であることが明らかとなった。

#### 研究3(村井)

HIV患者群では情報が十分に収集される前の段階で、意思決定が衝動的に行われていること、その神経基盤が前帯状皮質であることが示唆された。

#### 研究4(池田)

本冊子の分担研究報告を参照のこと。

#### 研究5(山田)

ピアとの接触は、孤立化による社会的分断を乗り越える他者との繋がりを生み出した。これは薬害被害者に対する社会心理的支援の方法として評価できる。

### 5. 自己評価

#### 1) 達成度について

##### 研究1(大山)

COVID-19の影響もあり十分なサンプル数が得られなかったが、過年度の研究成果も加えると、HIV陽性者の心理的支援に関する新たな知見を付け加えることができる。

##### 研究2(安尾)

COVID-19による診療体制の変化および研究参加予定者の予定外受診のため、当初の予定通りにはリクルートが進まなかった。

##### 研究3(村井)

初年度のHANDと灰白質の解析結果は論文出版済み。昨年度のCD4と白質の解析結果は論文査読中の段階にある。

##### 研究4(池田)

本年度はコロナ禍の影響もありWeb調査の研究計画が大幅に遅れ、予定していた大阪府内の精神科医を対象とした研修会の開催の目途もたない状況である。

##### 研究5(山田)

薬害被害者に特有の心理社会的問題を包括的に分析するために重要な論点の一つである、HIV感染に伴うスティグマの問題を指摘できた。

#### 2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

##### 研究1(大山)

HIV陽性者の抑うつや不安、行動上の問題に対する認知行動療法による介入研究はあるが、パーソナリティ変容に働きかける力動的心理療法による介入研究はほとんどない。

##### 研究2(安尾)

受診中断に関する心理力動の一端が明らかとなり、先行研究での指摘とは異なる知見が得られたことには学術的・臨床的意義があると考えられる。

##### 研究3(村井)

HANDの生物学的基盤・病態について、MRI画像を用いることで、認知機能検査と採血のみの評価よりも正確かつ詳細な検討ができ、陽性者の心理的支援のための基盤情報を提示できると考える。

#### 研究4 (池田)

HIV陽性者の多様なメンタルヘルスや、高齢化するにつれて認知症の合併やHANDを念頭においた診療体制の構築が望まれており、大阪府内の精神科医療機関の連携構築体制ができると全国のモデルとなりうる。

#### 研究5 (山田)

ART以降においても残る、スティグマに由来する「生きづらさ」の問題は、薬害被害者の立場に立った質的研究によってのみ、心理社会的支援を考えることができる。

#### 3) 今後の展望について

#### 研究1 (大山)

研究の助成期間を終了しても、本研究で得られた膨大なデータの分析は継続していく予定である。

#### 研究2 (安尾)

今回の結果を臨床現場に合わせて咀嚼し還元することを通して、受診中断の予防、受診再開、受診継続のための支援に活かすことができると考える。

#### 研究3 (村井)

陽性者の認知機能障害の実態と神経基盤について情報発信を行い、陽性者の心理的支援につなげるための基礎情報を蓄積していく。

#### 研究4 (池田)

現在、調査中のHIV陽性者の精神科診療実態を明らかにすることで、これまで明らかになった精神科医療機関における研修ニーズと合わせて、大阪府の精神科医療体制の構築につなげていく。

#### 研究5 (山田)

本研究の成果は薬害被害者だけでなく、新しく発生した新型コロナウイルスの感染者に対する差別に対しても示唆を与えることができる。

## 6. 結論

#### 研究1 (大山)

HIV陽性者のカウンセリングにおいては、4~5回目の面接あたりで、自己の意味づけの枠に収まりきれない他者性に関してどのような態度をとるかが、その後の展開と支援をアセスメントする鍵となる。

#### 研究2 (安尾)

受診継続のためには、自責傾向の緩和および問題解決方法の明示などの援助が重要であり、そのための具体的方策を臨床現場に提示する必要性が示唆された。

#### 研究3 (村井)

結果をまとめ、英文雑誌を介して海外への日本の患者群の状態を発信するとともに、患者支援の助けとなる生物学的基盤情報の提示を行う。

#### 研究4 (池田)

HIV陽性者に対する精神科診療は通常診療と同様に実施できる。精神科医向けに特化した研修会の実施により、連携体制の構築が可能である。

#### 研究5 (山田)

HIV感染が薬害被害者に「生きづらさ」をもたらしている。当事者のインタビューを継続して行うことによって、より良い心理社会的支援方法を提示できる。

## 7. 知的所有権の出願・取得状況 (予定を含む) (太字)

なし

## 研究発表

### 研究開発代表者

#### 山田富秋

1) 山田 富秋 (松山大学)、早坂 典生 (特定非営利活動法人りょうちゃんず)、橋本 謙 (岐阜県・愛知県スクールカウンセラー)、種田 博之 (産業医科大学)、入江 恵子 (北九州市立大学)、小川 良子 (看護師)、宮本 哲雄 (国立病院機構大阪医療センター)

薬害被害者の「感染」の心理社会的意味 2020年11月 第34回日本エイズ学会学術集会・総会オンライン大会 口演

### 研究開発分担者

#### 大山泰宏

口頭発表 (国内)

1) 荒木浩子、高橋紗也子、田中史子、山本喜晴、市原有希子、大澤尚也、清水亜紀子、仲倉高広、野田実希、山崎基嗣、大山泰宏

HIV 陽性者に対する心理カウンセリングでの課題に関する研究. 心理臨床学会第39回大会、2020、オンライン開催.

#### 安尾利彦

特になし

### 村井俊哉

原著論文による発表

欧文

1) Kato T, Yoshihara Y, Watanabe D, Fukumoto M, Wada K, Nakakura T, Kuriyama K, Shirasaka T, Murai T. Neurocognitive impairment and gray matter volume reduction in HIV-infected patients. J Neurovirol. 2020 Aug;26(4):590-601. doi: 10.1007/s13365-020-00865-w. Epub 2020 Jun 22. PMID: 32572834.

口頭発表

海外

1) Y. Yoshihara, T. Kato, D. Watanabe, T. Shirasaka, T. Murai. Differences of cognition and brain white matter between cART-treated HIV-infected patients with low and high CD4 nadir. Society for Neuroscience, Chicago, Illinois, October 19-23, 2019 (ポスター発表)

### 池田 学

和文

1) 金井講治, 長瀬亜岐, 池田学:大阪府精神科医療機関における HIV 陽性者に対する診療の実態と研修ニーズ 日本エイズ学会誌 (投稿中)

口頭発表

国内

1) 金井講治, 長瀬亜岐, 池田学: 大阪府の精神科医療機関における HIV 陽性者の外来診療の実態. 日本エイズ学会, 2020 年, 幕張 (Web 開催).